▼今回のランナー

望月正彦

もちづきまさひこ●1952年山梨県生まれ、岩手県花巻市育ち。1974年人文学部で経済・法律を学び、卒業後は岩手県職員に。助役、局長等を経て2010年から現職。趣味は自然散策と釣り。

Yamadai SEIKA Relay

山大聖火リレー

懸命の成果

東日本大震災で甚大な被害を受けながらもわずか5日後には一部運行を再開し、3年後の今年4月6日には全線復旧を果たした「三鉄」こと「三陸鉄道」。その見事な復活劇を指揮した社長として一躍注目を集めた望月正彦氏は、誇らしいことに本学人文学部の卒業生だ。山梨県で生まれ、岩手県花巻市で育った望月さんは、経済・法律系のコースがある本学に進学し、２年次からは岩手県職員を目指して「公法ゼミ」で地方自治制度を一所懸命に勉強したという。その一方で、バレー部での部活やサウナの受付、喫茶店のウェイターなどのアルバイトにも奔走。ゼミやサークルの仲間とのコンパや馬見ヶ崎川での芋煮会など、楽しい思い出も数多い。大学での学びと多彩な経験が功を奏し、希望通り岩手県職員に採用され、岩手県企業立地推進課長、久慈市助役等を歴任の後、2010年6月に三陸鉄道株式会社の代表取締役社長に就任した。そのわずか9カ月後にあの大震災に見舞われたことになる。

「もともと赤字続きだった三鉄は本当に必要なのかとの思いもよぎったが、“今後も三陸鉄道が必要だ”という地域の人々や鉄道ファンの声、全国からの支援や応援に背中を押され、スタッフと共にがんばれた」と望月さん。復旧後の活性化には観光客を呼び込まなければと、自らユニークな企画を実行するとともに、社員にも失敗を恐れることなくのびのびと仕事に取り組める環境を与えた。マスコミも上手に活用し、注目度を高める仕掛け作りにも手腕を発揮。また、社員の間でも部下の声にもちゃんと耳を傾けてくれる、趣味の話も楽しい社長として信望も厚い。

「大学では様々な経験をし、友情を育んで欲しい。そして、自分の目標を定め、それを実現させるプロセスをしっかり実行することが大切。努力すれば報われるのが人生です」と語る望月社長。かずかずの試練を乗り越えて「努力は報われる」を実証してきた望月先輩の後に続きたい。

「三鉄」の復旧・復興をパワフルに牽引、これからが正念場と、さらなる挑戦は続く。

望月正彦　三陸鉄道株式会社 代表取締役社長

震災のわずか2日後、3月13日に被災状況を把握するために現地を視察した際の写真。現場は田老駅の久慈方面。線路上に流されてきた屋根の上にのっているのが望月社長。

今年4月6日に宮古駅前で執り行われた北リアス線全線運行再開記念式典でのテープカットの様子。「三鉄で登校してほしい」と全線復旧の日程は沿線の学校の始業式に合わせた。